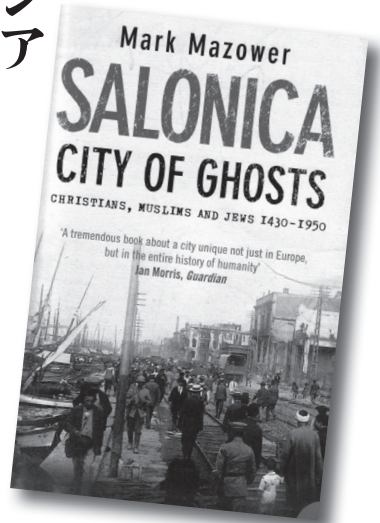


【選評】
東京大学准教授
池内恵

ギリシア 切り取られた過去



Salonica: City of Ghosts Christians, Muslims and Jews 1430-1950

Mark Mazower
London, Harper Perennial, 2004

この書評が出るころに、ユーロ圏の債務危機に収束の見通しは多少たりともついているのだろうか。なかでもギリシア債務危機への救済策は二転三転して紛糾し、いつ決着がつくのか誰にもわからない。ユーロ圏入りの際に財政を粉飾していたことが判明し、パンドレウ前首相がEU諸国による支援策の受け入れを表明した後に「卓袱台返し」して国民投票にかけると発表

し、支援と引き換えの財政引き締め策に反対するデモが過激化する、といった状況から、ギリシアの政府や国民に「当事者能力がないのではないか」という疑念が持たれてもやむを得ないだろう。「なぜギリシアをEUに入れたのか」「ギリシアはヨーロッパなのか」というヨーロッパ統合の過程で「言わないことになっていた」根本的な問いが、債務危機をきっかけに公然と語られるよう

になった。

近代のギリシアがヨーロッパではないという考えは、それほど突飛なものではない。歴史や政治体制や社会風土は、むしろトルコやレバノンのほうにほぼ近く感じられる。特定の家系に重要なポストが受け継がれてきた家産制的な政治史も東地中海の伝統に根ざしているようにみえるし、「ギリシア料理」と称するものの大部分は、トルコ料理やレバノンやエジプトのアラブ料理に寸分違わない。近代のギリシアはオスマン帝国の一地方が独立して成立した国であって、ヨーロッパよりも、中東諸国との共通性や連続性を多く含んでいても不思議はない。

ギリシア様式の「再輸入」

しかしそのような過去を塗り替え、切断するような近代の歴史があることも重要な事実である。それによって、

近代以前の過去は思い出しにくくなって
いる。そこにはイギリスやフランスやド
イツなどの近代の先進ヨーロッパ諸国
が、「手取り足取り」ギリシアを「ギリ
シア化」していった歴史がある。

このことは、首都アテネを少し注意
深く歩いてみると感じられる。アテネ
には「古代ギリシア風」の建物が多く
ある。もちろんパルテノン神殿のよう
に真正正銘の古代遺跡もなかにはある。
しかし現在使われている多くの建物は
皆、一九世紀も半ば以降になってから
古代建築を模して建てられたものであ
る。しかも調べてみると、ドイツ人な
ど外国人の建築家による設計が実に多
い。これにはギリシアをめぐる近代ヨー
ロッパ史や外交史が関係している。

一八二二年のオスマン帝国に対するギ
リシア独立戦争をヨーロッパ諸国は支援
し、英国のロマン派詩人バイロンのよう
に義勇兵として駆けつけて戦死する者ま

で現れた。ギリシアの独立と政体は、列
強の勢力均衡外交のなかで決まった。オ
スマン帝国と英・仏・露の駆け引きのな
かで、一八三〇年のロンドン議定書でギ
リシア完全独立が認められ、三二年には
ギリシアを君主国とするロンドン条約が
締結された。そこで君主として送り込ま
れたのが、英・仏・露のいずれとも縁の
薄いバイエルン王国のオットー王子であ
り、オソン一世（在位一八三二―一八三二）
として即位して近代ギリシア国家が成立
した。

独立の翌年に首都とされたアテネは、
当時の人口数千人で、オスマン帝国の辺
境の小都市であつたにすぎない。ギリシ
ア文化圏の主要都市はまだオスマン帝国
の版図にあつた。アテネを近代ギリシア
の首都とするべく、オソン一世は都市計
画と建築計画を推進した。そこでドイツ
やオーストリアから、多くの「お雇い外
国人」的な建築家が招かれた。

建築の分野では一八世紀後半から
一九世紀にかけて、ヨーロッパ諸国、
特にドイツや北欧、そして北米でも、
新古典主義をさらに推し進めた「ギリ
シア復古様式（Greek Revival）」が
流行していた。北方ヨーロッパから持
ち込まれた建築様式によって近代のア
テネは、「ギリシア化」されたといえる。

例えば正面のドーリア式列柱がいか
にも古代ギリシアを思い起こさせる国
会議事堂は、元来はオソン一世の王宮で
あり、その父であるバイエルン王ルー
ヴィヒ一世がお気に入りにしていたミュ
ンヘンの建築家フリードリッヒ・フォン・
ゲルトナーの設計で、一八四二年に完成
したものである。ミュンヘンの建築界で
ゲルトナーの後継者の地位にあつたルー
ドヴィヒ・ランゲは国立博物館の設計を
行つた。さらに広範にギリシア風の建築
設計を数多く行つたのがコペンハーゲン
生まれのハンス・クリスチャン・ハンセ

ンとその弟で後にオーストリアに帰化したテオフィル・エドヴァルド・フォン・ハンセンだった。この兄弟は一八三〇年代から四〇年代にわたってギリシアに滞在し、アテネ大学・アカデミー・国会図書館の「三部作」など、ギリシア復古様式の建築を国全体に行き渡らせるのに推進役となった。

パナジオテイス・カルコスのように、ランゲの国立博物館の設計に修正を加えるなど、ギリシア人建築家は北方ヨーロッパの「ギリシア風」建築を受け入れながら育っていった。ギリシア復興様式を自在に消化し、ギリシアの地に定着させたのが、ドイツ生まれで二〇歳代半ばに弟の方のハンセンに付き従ってギリシアに渡り、後に帰化したエルンスト・ツイラーだったというのも象徴的だ。ツイラーはいわば「現場監督」として、ミュンヘンやウィーンなどで多くの時間を過ごしていた

「お雇い外国人」たちと連絡を取りながら建築施工を進め、やがて自らも設計を行うようになった。

ツイラーの設計による代表作は、現在アテネの貨幣博物館になっている。元々は考古学者ハインリヒ・シュリーマンの邸宅として一八七八年から八〇年に建てられた。ギリシア神話の記述に導かれてトロイア遺跡を発掘したドイツ人考古学者が、ドイツ人建築家の設計した古代ギリシア風の邸宅に住む、という光景は、ギリシアがヨーロッパの内側に抱え込まれた「植民地」だったのではないかと、という印象を強くする。そうなると現代のギリシア政治は、「ポスト植民地主義の政治」という様相があるのかもしれない。

忘れられたギリシア文化の栄光

こういった観点で近代ギリシア政治史や近代アテネ建築史を日本語か英語

で記述した本があつたら読みたいと思つて探してみたのだが、探し方が悪いのか、見つけれなかった。詳しい人がいたらぜひ教えてもらいたい。

アテネではなく、サロニカであれば良い本がある。そして近代以前のギリシアを思い出すには、アテネよりサロニカがふさわしい。マーク・マズワールの『サロニカ・亡霊の街——キリスト教徒・ムスリム・ユダヤ人 1430-1950年』は、失われた都市についての物語である。サロニカ（現在のギリシア語ではテッサロニキ）は現在のギリシアの北東部に位置する。マケドニア帝国のアレクサンダー大王によつて建設され、その腹違いの妹の名をつけられたこの都市は、東ローマ帝国とオスマン帝国の時代を通じて、ビザンチウム（イスタンブル）に次ぐ第二の都市だった。一四二〇年にオスマン帝国に征服された後には、ムスリムやユダヤ人がギリシア人と混住して独自の文化が咲き誇る、オ

スマン帝国の「緩やかな専制」の下の多宗教共存の典例的な事例といえた。

ギリシア独立後も、サロニカはオスマン帝国の版図に残った。トルコ建国の父ケマル・アタチュルクの生まれた都市でもあり、オスマン帝国末期にはケマルを含む青年将校を中心とした「青年トルコ人」たちの「統一と進歩委員会」がサロニカに主要拠点を置き、スルタン・アブデュルハミト二世の専制政治を打倒する革命運動を画策した。一九二二年のバルカン戦争でギリシア軍が侵攻して初めて、サロニカは近代のギリシア国家に収まった。

本書の前半はこのオスマン帝国都市としてのサロニカの繁栄と多様性を描き、後半は一八二二年のギリシア反乱を境目に、戦乱と弾圧と反目によって共存と繁栄が崩壊していく過程を描く。一九二二年のギリシア軍侵攻以後、ムスリムは難民としてイスタンブールやアナトリア半島

に逃れていく。一九二三年のギリシア・トルコ間の住民交換では、逆にトルコ領土から逃れてきたギリシア正教徒がサロニカに流入することになる。ナチス・ドイツ支配下ではユダヤ人たちが収容所に送られていった。こうしてオスマン帝国治下に繁栄したサロニカは、失われた住民と、失ったものを嘆く新住民からなる「亡霊の街」となっていた。

近代のギリシア国家は、失われた栄光の記憶や、忘れ去られた「亡霊」たちに満ちている。ギリシア人の帝国の首都であり、ギリシア正教の教皇の座であった東ローマ帝国のビザンチウムは、征服されイスラーム教徒の首都イスタンブールとしてつくり変えられ、二度と帰ってはこない。サロニカのように、領土内にありながらその栄光が消し去られた街もある。古代以来ギリシア人の植民者が渡航し定着してコミュニティをつくってきたアレクサンドリアのような東地中海諸都

市でも、アラブ民族主義の時代に、ギリシア人の痕跡は風化していった。

現在のギリシア国家がヨーロッパであるか？と問われれば、近代においてヨーロッパ人が介在してつくったという意味で、紛れもないヨーロッパの一部ということが出来る。しかし「ギリシア」というものが古代から前近代に至るまで意味していたものの範囲は、現在のギリシア国家には収まりようがなく広い。その意味で、本来の「ギリシア」は現在の意味でのヨーロッパではない。ただしヨーロッパではなかった部分の多くを、ギリシアは永遠に失ってしまった。ギリシアは近代に与えられた切りつめられた形でのヨーロッパではない。ギリシアがドイツやフランスなどの支援の手の差し伸べに対して、依存と反発の綯い交ぜになった、独特の頑是ない態度を取るのも、どこかわかるような気がする。■